

第13期うきたむ学講座総括実行委員会次第

令和元年6月1日(土) 10:00~

1. 開会あいさつ 岩崎副実行委員長
2. 委員長あいさつ 吉田実行委員長
3. 座長就任 吉田実行委員長
4. 報 告
 - (1) 第13期うきたむ学講座事業報告並びに決算報告について
 - (2) 第13期うきたむ学講座の総括について
 - (3) その他
5. 協 議
 - (1) 第13期について
 - (2) 第14期講座実施計画について
6. 閉会あいさつ 岩崎副実行委員長

《実行委員》 *順不同・敬称略

委員長 吉田 勲

副委員長 岩崎義信 高梨善三郎(欠席)

委員 (出席) 佐藤鎮雄 秦 昭繁 佐藤公保 渡部眞治 青木慶一
角田朋行 益田則雄

(欠席) 小林貴宏 今 紘一 佐藤庄一 島崎正弘 島津憲一

清野春樹 二宮美夫 井田秀和 角屋由美子

古川和夫 高橋 拓 高橋信博 江口儀雄 蛭原紘子

海藤 元 桐澤民雄 手塚 孝 宮原博通

事務局 渋谷孝雄

第13期うきたむ学講座事業報告

1. 実行委員会等

- (1) 実行委員会 平成30年11月10日(土)10:00～ 考古資料館研修室
第13期講座の開催計画の決定、予算案の承認、平成31年度の特別講座の持ち方について
- (2) 運営委員会 平成30年6月17日(日)13:00～
第13期講座の実施計画案の検討、開催期日案の検討、予算案の検討
- (3) 総括実行委員会 平成30年6月17日(日)10:00～ 考古資料館研修室
第12期講座の総括

2. 講座の実施

- (1) 第1回講座 平成31年1月13日(日)13:30～ 参加者19名
講師：講話① 布施 賢治 氏(米沢女子短期大学)
講話② 渡部 幸雄 氏
- (2) 第2回講座 平成31年2月10日(日)13:30～ 参加者34名
講師：講話③ 五十公野 裕也 氏
- (3) 第3回講座 平成31年3月3日(日) 13:30～ 参加者12名
講師：講話④ 高橋 信博氏 氏(山形県地域づくりプランナー)
講話⑤ 守谷 英一氏 氏(東北芸術工科大学非常勤講師)
参加者数 延べ65名

3. うきたむ学特別講座

特別講座①

「高島町の石像文化財を探るー中世から近代までー」

日本民俗学会会員・日本石仏協会理事 加藤 和徳 氏

特別講座②

「下張りをはがす」

高島町教育委員会社会教育課 小林 貴宏 氏

参加者10名

日時：平成30年11月10日(土)13:00～

協力：高島町教育委員会

4. その他

- ①実行委員の募集・新任者の決定

第13期うきたむ学講座の総括

I. 講座内容

特別講座

平成30年11月10日(土)

特別講座①「高畠町の石像文化財を探るー中世から近代までー」

日本民俗学会会員・日本石仏協会理事 加藤 和徳 氏

特別講座②「下張りをはがす」

高畠町教育委員会社会教育課 小林 貴宏 氏

第1回講座

平成31年1月13日(日) 13:30~16:10 考古資料館研修室

講話①「米沢藩の軍制改革ー西洋流砲術導入をめぐる諸問題についてー」

布施 賢治氏(米沢女子短期大学)

講話②「東北から見た戊辰戦争」

渡部 幸雄氏

第2回講座

平成31年2月10日(土) 13:30~15:30 考古資料館研修室

講座③「高畠町とその周辺の鉾山」

五十公野裕也氏(山形大学理学部)

第3回講座

平成31年3月3日(日) 13:00~16:10 考古資料館研修室

講話④「やまがたの無形文化財 深山和紙~守り伝えるための地域づくり~」

高橋 信博氏(山形県地域づくりプランナー)

講話⑤「白鷹紬~生業(なりわい)について~」

守谷 英一氏(東北芸術工科大学)

II. 講座総括

(1) 参加者数

特別講座 (11月10日): 10名

第1回講座 (1月13日): 19名

第2回講座（2月10日）： 34名

第3回講座（3月3日）： 12名

延べ75名（前年度比+18名）

(2) 内容について

今期も助成金の申し込みはせず、受講料を主な収入源として、講座を開催した。講師は、主に置賜地方に関係する方をお呼びし、地域に関連する研究をされている方に発表していただいた。

特別講座は、当館研修室で開催した。2名の講師の方からお話をいただき実習も行った。ただし、第12期に続き、特別講座の参加者数がさらに少なくなり、開催時期や広報の方法に検討が必要であると考えられ、今回につながった。

第1回講座では戊辰戦争150年をテーマとした。布施先生から米沢藩に残る文書史料から米沢藩でも西南日本の諸藩には遅れたものの、西洋砲術を導入したこと。そして、西洋式を取り入れた諸藩との交流を広げて、藩内で演習も行ってはいたことが分かること。和式砲術は各流派が、流派毎に伝えていくのが原則であったが、西洋式ではこういった訓練は実用的ではなかったこと。西洋式の大砲や銃も藩内での製作を試みたのだが、うまくいかず、結局は輸入に頼ったこと。藩内でも後半には砲術各派の代表的な人物も西洋式(高島流)の訓練を受けたのだが、これは、藩を挙げて西洋流に変わったことを示すものということであった。しかし、それが実戦でどのくらい役だったかは分からないということだった。和式砲術は各流派が、流派毎に伝えていくのが原則であったが、西洋式ではこういった訓練は実用的ではなかったこと。西洋式の大砲や銃も藩内での製作を試みたのだが、うまくいかず、結局は輸入に頼ったこと。また、西洋式砲術採用は藩士間の身分的格差が邪魔となり、とくに上級藩士から不満が出るのだが、米沢藩では政治問題には発展しなかったと述べられた。

渡部先生にはご自身の著書の内容についてお話をいただいた。会津藩は藩主松平容保公が京都守護職を受けた時点で、後の戊辰戦争の敗戦が運命づけられていたこと、米沢・仙台藩も列強との近代戦争の経験のある薩摩・長州の装備とに決定的な差があり、勝てる戦争ではなかったこと、著述するなかで、無謀な戦いに命を落とした方々に思いを馳せ、著作刊行後に慰霊祭を行ったことを淡々とお話しされました。もともと、勝てる戦ではなかった、徳川宗家のために忠実に守護職を全うした会津藩の痛苦は余りにも悲劇的という語りが印象的であった。

第2回講座では自然科学分野では数年ぶりの開講となった。五十公野先生が得意とされている分野から「高島町とその周辺の鉱山」という演題での講義し

ていただいた。はじめて本館にお出で頂いた方も含め、多くの参加があった。参加者の皆さんも知らなかった鉾山も少なくなく、講義後に行われた参加者も交えた懇談では鉾山に関する多方面からの議論で盛り上がった。「鉾山」に対する関心は高く、かつて鉾山でお仕事をされていた方の参加もあり、参加者数が当講座としては久しぶりに30名を越えた。終了後も、鉾山についての講座をまた開講してほしいという要望が寄せられるとともに、参加者間での新たな交流も生まれている。

第3回講座は「置賜の伝統的地場産業」をテーマとした。深山和紙については山形県地域づくりプランナーとしてご活躍中の高橋信博氏から、「白鷹紬」については民俗学研究者で東北芸術工科大学非常勤講師の守谷英一氏から講義をして頂いた。

江戸時代から伝わる深山和紙は昭和55年に県の無形文化財に指定されたが、和紙の需要の減少により、今から20年前にはかつて40戸あった和紙漉き農家が2戸になってしまい、その2戸も今すぐにでもやめたいということで存続が危うくなったことをうけ、相談を受けた地域プランナーの高橋氏が「いきいき深山郷づくり推進協議会」を立ち上げ、仕掛け人として活動を開始したとのこと。「深山生き生き 行きたくなる郷」のスローガンのもと、外部から人を呼び込んでの四季を通じた様々な体験活動や深山の色・草花・樹を決めて、屋根や壁の色を塗り、植栽・植樹を行い、街灯の統一も行ったという。2戸に減った和紙漉き農家に加え推進協議会に営農部を設置して、共同作業で和紙の原料となる楮を耕作放棄地に育て、14工程にも及ぶ和紙づくりのなかの力仕事の多くを営農部の皆さんに分担していただくようになったこと、こういった活動が新たな紙漉技術者の誕生につながり、これが、深山和紙の再興に大きな役割を果たしたということであった。現在の深山和紙の技法は昔のままでありながら、品質は歴代最高のものとなっており、作った和紙は引く手あまたであるということで、さらに、「紅」、「紙」、「織」という糸偏の文字の伝統産業と共にそれぞれの振興につながる新たな試み（仕掛け）も進んでおり、リンゴや紅花の入った和紙を漉き、和紙の「からめ糸」の製造で特許も取得したということである。地域の宝・伝統を再認識し、誇りの持てる地域環境があれば、若者はふるさと回帰する、20年にわたって続けられている壮大な「現場での実験結果」は、確実に若者のふるさと回帰につながっているということで、「そこに住む人自信と誇りの再生」こそ地域づくりの成功の秘訣というお話は受講者の心を打つものであった。

守谷氏からは学位を取得された「生業(主に手仕事)を視点とした地域研究」の一例として「白鷹紬」のお話しをいただいた。最初に「白鷹紬」は置賜紬の一員として「伝統工芸品」に指定されていること、2007年に「本場米琉(白鷹

板縮小緋)」として山形県指定の無形文化財に指定され、現在は白鷹町の2軒の工房でしか生産されていないこと、緋糸の染色に用いられる「板締め」染色法は東京都の「村山大島紬」（東京都指定無形文化財）と「白鷹紬」しか残されていない貴重な技術であることという概要の説明があった。つぎに「白鷹紬」の系譜についての説明があり、米沢織りと白鷹紬・長井紬についてその開始・担い手・産地・生産の季節性・使用糸、製品の観点から違いの指摘があった。

米織りは米沢藩の殖産興業政策から始まったのに対し、長井・白鷹紬は農民の自給品であり、担い手は家臣団の妻女と農家の女性、産地は米沢城下と下長井北部、生産は米織りが通年であるのに対し、長井・白鷹紬は冬期間の生業要素の一つであったこと、使用された糸は繭から繰り出した絹糸に対し、真綿から紡いだ紬糸であったことなどの相違点を指摘された。板縮染色は明治37年に導入され、翌年には独立した染色業者と板大工も生まれるなど瞬く間に普及したということで、この技法の普及で長井紬と白鷹紬の区別が顕在化しやがては両者が分離したとのことであった。白鷹紬は農家の冬期間の生業の一つで機織り工場(機屋)は発達せず、今でも織り手は出来高払いの賃金、労働時間は自分で決める独立した事業者であり、そこにはつぎのようなアイデンティティが認められるということであった。①自己の身体がものを生み出す存在であること(誇りであり、喜びでもある)。②ものを作ってきた歴史に位置付けられる自己(伝承の意義)。③ものを生み出した土地、家族に結びつく自己(帰属意識)。これらは、現代のもの作りが機械化・自動化の中で失われてきたものであり、守谷氏は白鷹紬の生産形態からつぎのような考えを示された。現在の産業社会を支配する機械文明は、生産活動から身体性を排除する方向で動いている。それだけでなく、生活維持のための諸活動から身体性を排除することが進歩や発展と考えられている。しかし、自分の手で何かを作ることは、人間にとって根源的な喜びであるといえ、生産過程に身体の技術を残存させている産業を批判的に検討することが本来の生活に資する知見を生み出すのではないかと。守谷氏のお話もまた効率化を追究するあまり、大切なことを忘れ去ってしまいがちな現代に生きる私たちにとって警鐘となるものであった。

また、第3回講座(3/3)終了後に、アンケートを行った(7頁参照)。多くの方に参加していただけるよう、講座内容の検討、チラシの配布を継続していきたいと思う。

(3) 第14期うきたむ学講座の開催について

第13期と同様、受講費が主な収入源となる。現段階では、第14期の講座内容については未定で、特別講座は本日米沢市で開催ということとなった。14期も地元の研究者などの発表の場として活用できるようにしたいと考える。

アンケート結果

※平成 31 年 3 月 7 日／第 3 回講座

〈回答者 14 名／受講者 12+2 名〉

① 本講座をどこでお知りになりましたか？

- | | | | |
|--------------|-----|------|------|
| 1. チラシを見て | 9 名 | | |
| 2. ホームページを見て | 2 名 | | |
| 3. 知人に聞いて | 1 名 | (未回答 | 2 名) |
| * チラシを取った場所 | | | |
| ・ 当館 (郵送含む) | 3 名 | | |
| * 米沢新聞 | 2 名 | | |

② 講座の内容はいかがでしたか？

- | | | | |
|-----------|---------|----------|----------|
| 1. 良かった | 1 回 5 名 | 2 回 12 名 | 3 回 13 名 |
| 2. まあまあ | 1 回 2 名 | 2 回 1 名 | 3 回 1 名 |
| 3. 良くなかった | 1 回 0 名 | 2 回 0 名 | 3 回 0 名 |
| 4. 未回答 | 1 回 7 名 | 2 回 1 名 | 3 回 0 名 |

* 具体的な感想があれば

- ・ 案内チラシが遅く 1 回目に参加できなかった。
- ・ 広い分野の話を聞けて良かった。
- ・ 直接考古学とは関連がないのが残念。漆を現代によみがえらせた事例が聞きたい。
- ・ 第 2 回の高島町の鉱山、もっと地形・地質も教えていただきたい。
- ・ 鉱山に興味のある人に会うことができ大変良かった。
- ・ 白鷹の元気素晴らしい。
- ・ 講座で詳しい話が聞けて地域の素晴らしいことをたくさん知ることができた。楽しかった。
- ・ 講師が細部にわたり、説明いただいたのでわかり易かった。

③ 講座の日時はいかがでしたか？

- | | |
|----------|----------------------------|
| 1. 適切 | 13 名 |
| 2. 適切でない | 1 名(午前 10 時とか午後 2 時にしてほしい) |

④ 受講料はいかがでしたか？(600 円／回)

- | | |
|-----------|---------------------------|
| 1. 高い | 1 名(500 円がいい。ワンコインで払いやすい) |
| 2. ちょうど良い | 13 名 |
| 3. 安い | 0 名 |

⑤ 来年度も同様の講座があったら参加したいですか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. 参加したい | 13 名 |
| 2. 参加しなくてもよい | 0 名 |
| 3. 内容によって考える | 1 名 |

*取り上げてほしいテーマがあれば

- ・有形民俗文化財、植物、動物、鉱物
- ・すべてのテーマ
- ・縄文、弥生、古墳、地質
- ・縄文・古代・地質
- ・鳥居、古代の食生活
- ・なんでもいい
- ・動物
- ・中世、地質・鉱物
- ・中世・近世、民俗学
- ・置賜地域の縄文、中世、無形民俗、植物、地質、鉱物
- ・縄文の土偶、中世、無形民俗、植物

うきたむ学講座実行委員会規約

[趣旨]

第1条 置賜地方の歴史解明および歴史理解の普及を広い視野から幅広く推進するため、置賜地方の歴史等関係者および団体が相集い研修し合うことを目的とする。

[名称]

第2条 この会の名称を「うきたむ学講座実行委員会」と称する。

[組織]

第3条 趣旨に賛同し、講座を支える意思を有する実行委員で組織する。

[活動]

第4条 趣旨を達成するための「うきたむ学講座」を山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館と共催し、かつ必要な活動を行う。

[実行委員]

第5条 実行委員は、本会の活動を代表者を通じて運営するとともに、会の活動に参加し、一般市民の参加を呼びかける。

[役員]

第6条 本会に次の役員をおく。

- (1) 実行委員長 1名
- (2) 副実行委員長 2名
- (3) 運営委員 若干名
- (4) 事務局員 若干名

[機関]

第7条 本会の運営のため、次の機関を置く。

- (1) 実行委員会(全体会) 定例会を年1回開き、方針および活動計画を決定する。
- (2) 運営委員会(役員会) 正副実行委員長・運営委員・事務局員をもって構成し、実行委員会で定められた事項に基づき会の運営を行う。
- (3) 事務局会 正副実行委員長の指示に基づき実行委員会および役員会に関する事務等の協議を行う。

[会計]

第8条 本会の会計は、うきたむ学講座受講費その他の収入をもって充てる。受講費は当分の間600円とする。

[事務局]

第9条 本会の事務局は、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館に置く。

うきたむ学講座実行委員名簿

平成31年5月30日現在

No.	氏名	役員	所属等
1	青木 慶一		
2	井田 秀和		元高島町教育委員会
3	岩崎 義信	副委員長	長井市教育委員会
4	江口 儀雄		置賜史談会
5	蛸原 紘子		小国町役場町民税務課
6	海藤 元		長井市教育委員会
7	角田 朋行		南陽市教育委員会
8	桐澤 民雄		うきたむ考古の会会員
9	小林 貴宏	運営委員	高島町教育委員会 うきたむ考古の会幹事
10	今 紘一		長井文化財保護協会事務局長
11	佐藤 鎮雄	運営委員	前考古資料館館長
12	佐藤 庄一	運営委員	山形考古学会会長
13	佐藤 公保		米沢市教育委員会
14	島崎 正弘	運営委員	高島町文化財保護会顧問
15	島津 憲一	運営委員	高島町文化財保護委員会会長
16	角屋 由美子	運営委員	米沢市上杉博物館 米沢古文書研究会
17	清野 春樹		置賜民俗学会会員
18	高梨 善三郎	副委員長	うきたむ考古の会副会長
19	高橋 拓		飯豊町教育委員会 東洋陶磁学会
20	高橋 信博		置賜総合支庁
21	手塚 孝		まんざり会会長
22	二宮 美夫		元高島町図書館長 郷土史研究家 高島町文化財保護会会長
23	秦 昭繁	運営委員	考古学研究者
24	古川 和夫	運営委員	屋代村塾代表
25	益田 則雄		小国町文化財調査委員
26	宮原 博通		高島町地域経済活性化戦略会議アドバイザー
27	吉田 歆	委員長	米沢史学会事務局長 米沢女子短期大学
28	渡部 眞治		徳太郎文庫長
29	渋谷 孝雄	事務局	考古資料館館長

(五十音順)

◎委員長(運営委員長)：吉田 歆

○副委員長(運営副委員長)：岩崎義信・高梨善三郎

●委員(運営委員)：小林貴宏・佐藤鎮雄・佐藤庄一・島崎正弘・島津憲一・角屋由美子・秦昭繁・古川和夫

●事務局：渋谷孝雄

第14期うきたむ学講座実施計画(案)

1. 趣旨

置賜地方に関する研究を行っている方に研究成果を講演いただき、置賜地方の原始・古代・中世・近世の歴史や民俗・自然について理解を深める契機とする。

2. 主催 うきたむ学講座実行委員会

3. 共催 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

4. 協力 米沢市教育委員会・米沢女子短期大学

5. 日程・内容

〈特別講座〉

◇令和元年6月1日(土) 13:30-16:30 (米沢女子短期大学)

米沢史学会 2019 と共催

「溝で囲まれた遺跡に迫る—大南遺跡—」

コーディネーター 吉田 歆(山形県立米沢女子短期大学)

「大南遺跡発掘調査の成果」 佐藤公保氏

「大南遺跡の年代測定の結果」 門叶冬樹氏

「大南遺跡出土の陶磁器」 山口博之氏

「大南遺跡の神像」 山下 立氏

〈第1回講座〉

◇令和2年1月12日(日)13:30-16:10

講師2名

〈第2回講座〉

◇令和2年2月2日(日)13:30-15:30

講師1名

〈第3回講座〉

◇令和2年3月1日(日)13:30-16:10

講師2名

6. 会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室・その他

7. 経費 受講者1名につき600円の受講料をもって運営経費とする。 (講師・発表者・正副委員長以外は全て受講者扱いとする) その他必要経費については別紙予算案の通り